03/11/23 礼拝メッセージ 近藤修司 牧師

主 題:神に会う備えをする

聖書箇所:ペテロの手紙第一 4章7-9節

先日のマラソンで「頑張れ!」と必死に日本選手を応援する声を耳にしました。ペテロはこの沿道の 観衆や関係者と同じように、信仰のレースを走っていた当時のキリスト者に対して、そしてまた、今走 り続けている私たちにも「頑張れ!」と応援の声を張り上げているのです。主に対して忠実に生きるこ とは永遠に価値ある生き方である、だから頑張れ!と言うのです。

5,6節で「さばき」について話をしたペテロは、そのことを覚えながら次のように言います。 7節「万物の終わりが近づきました。」と。

☆「終わり」という名詞の意味は:

○主イエスを信じることのなかった者にとっては、恐ろしく後悔してもしきれない悲しみと絶望の日です。5節には「すぐにもさばこうとしている方に対して、申し開きをしなければなりません。」とあり、17節にも「…神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなるのでしょう。」と書かれています。

主に逆らい続け、イエスのいのちという測りしれない犠牲をもって主が備えてくださった救いを拒み、ないがしろにすることで罪の赦しのチャンスを逃してしまった罪人に対する神の公正な審判が下るときです。

○主イエスを信じた者にとっては待望の日です。この「終わり」とは「目標」という意味があります。 すなわち「キリスト者が期待し、待ち焦がれていた日。不完全な人間の審判ではなく、正しい神による 審判が下る日、主からの褒美をいただく日です。

「終わりの日がすぐそこまで来ている!」と、ペテロはその日が本当に近いということを信じていました。そのことを証明するのが「近づきました(動詞)」ということばです。彼はこれを完了形で記しています。それは、ペテロの中ではあたかもその日がもうすでに訪れたかのように受け止めていたのです。☆「ですから」という接続詞は:

これはペテロの励ましです。その時が近いのだからしっかりとゴールを見つめて走り続けるようにとペテロは勧めるのです。この地上での生活に別れを、終わりを告げる日が近づいている、だから、今日という日を正しく、しっかりと歩みなさいと励ますのです。

4章の1節からペテロは、私たちキリスト者は何のために生きているのか、何のために救われ、生かされているのかを覚えて今日を生きなさいと教えてくれました。キリスト者の生きている目的、それは「主のみこころに従う」ことであると。そしてこの7節から、その生き方を具体的に教えて行くのです。

ペテロの教える終わりの日に相応しいキリスト者の生き方とは?

二つの生き方を教えています。

神との正しい交わりをもつこと 7節

人との正しい交わりをもつこと 8-11節

それによって神に会う備えができるのだとペテロは教えてゆきます。

1. 神との正しい交わりを保つこと 7節

そのために、

7節「…祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」

1) 正しい祈りの生活をもつ:「祈りのために」は複数です。個人の祈り、人との祈り、公の祈りなどいろいろな祈りをペテロは考えていたからです。彼は、ただ「祈ればいい」というのではなく、「祈りのために」と、祈りをより有効に適切に為すための教えを与えているのです。

ここで、正しい祈りとは?どういう祈りかを見ましょう。

生まれながらに私たち人間は何かに祈りながら生きてきました。これまで私たちがしてきた祈りとは、 ただ自分のお願いをすること、また「自分の願いを叶えてもらう手段・方法」であったのです。そのよ うに信じてきました。しかし、イエスは弟子たちに「祈り」とは何かを教えられました。

ョハネ14:13「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」と。「名」はその人自身を指します。主のみこころを求めて祈って行くならその正しい祈りによって「父が子によって栄光をお受けになる」のです。これが「祈り」の本当の意味だと教えるのです。祈りは神の栄光を表わす機会、神の偉大さを告白する

機会の一つなのです。すなわち、神のみこころが為されることを信じ、期待して祈るのです。そして、 為されたみわざを見て主の偉大さをほめたたえる、これが祈りなのです!!祈りも礼拝です。 正しい祈りの生活をもつためにはどうすればよいのかを続けて7節から見て行きます。 二つの動詞、「心を整え」と「身を慎む」に注目してください。

- (1) 「心を整え」:考え方が健全であるという意味ですが、このことばの別訳を見ます。テトス2:6では「同じように、若い人々には、思慮深くあるように勧めなさい。」、「思慮深く」とあります。これは「分別がある」という意味で、何が大切で何がそうでないかを判断できるということです。また、マルコ5:15(ルカ8:35, II コリント5:13)には、レギオンという名の悪霊たちが追い出された後、その男は「正気に返ってすわっている」とあります。それまでは彼は正しく判断できなかったのです。この世は放縦、わがまま、欺きに満ち、また悪霊の影響を受けています。クリスチャンもそのようなものによって惑わされてしまう危険性があります。だから、いつも正しく状況や出来事を判断する心を保ち続けることが大切なのです。「心を…」と心が強調されているのは、キリスト者が日々正しく生きていくには、自分の行動や態度を制御する心が整えられることが重要だからです。
- (2) 「身を慎む」:飲酒を慎むとか、まじめであるという意味です。同じ I ペテロ1:13にも「あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、」とあります。落ち着いて、ぐらつかない、しっかりした、自制心をもちなさい、とすでに学びました。この4:7は祈りが妨げられないようにとの励ましです。5:8は悪魔の誘惑に負けないようにとの励ましです。ここでは「終末が近い」というニュースによって、ある人々は動揺することをペテロは知っていたので「身を慎む」ようにと教えるのです。終末が近いということを聞くと、すぐに極端な行動に出る人たちがいると、パウロはテサロニケの教会の問題を記しています。II テサロニケ2:2 「…主の日がすでに来たかのように言われるのを聞いて、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでください。」、3:6には「兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名によって命じます。締まりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい。」、3:11「ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしている人たちがあると聞いています。」と、このように仕事を止めて人々の厄介になっていた人々がいたのです。そこで、パウロはテサロニケの教会に宛ててII テサロニケ3:12「こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」と命じるのです。

現在でもそのような極端な行動を起こす人がいるから、イエスは「目を覚ましていなさい」(マタイ24:42)と教えます。ペテロはいつでもどんな時でも動揺することなく、冷静に、神のみこころをよく考えて選択して行くようにと教えるのです。

この二つの動詞が教えることは、正しい判断力を持つことが大切だということです。そして、この二つの動詞の時制は、読者に対して今行動を起こすという決断の必要性を強調して訴えるのです。

どうすればこの正しい判断力を身につけることができるのでしょう?

みことばにしっかり立つことです。詩篇119:11に「あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。」とある通りです。今の世のこの状況の中で「日本もテロの標的になるかもしれない、どうしよう?」と不安をもつ人が出ていますが、みことばはこのように教えています。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。」(マタイ24:7)。まさに神の言われる通りになってきています。私たちは動揺することなく神に信頼し、主権者である方の御手に委ねて行くことです。

また、失職や老後の不安をもちますが、旧約のエリヤ、エリシャの時代、大変な世にあって神はどんなにすばらしいわざをなされたかを知ったなら、私たちの信仰は強められます。列王記第一17:8‐16「すると、彼に次のような主のことばがあった。9「さあ、シドンのツァレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そこのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。」10 彼はツァレファテへ出て行った。その町の門に着くと、ちょうどそこに、たきぎを拾い集めているひとりのやもめがいた。そこで、彼は彼女に声をかけて言った。「水差しにほんの少しの水を持って来て、私に飲ませてください。」 11 彼女が取りに行こうとすると、彼は彼女を呼んで言った。「一口のパンも持って来てください。」 12 彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私は焼いたパンを持っておりません。ただ、かめの中に一握りの粉と、つぼにほんの少しの油があるだけです。ご覧のとおり、二、三本のたきぎを集め、帰って行って、私と私の息子のためにそれを調理し、それを食べて、死のうとしているのです。」 13 エリヤは彼女に言った。「恐れてはいけません。行って、あなたが言ったようにしなさい。しかし、まず、私のためにそれで小さなパン菓子を作り、私のところに持って来なさい。それから後に、あなたとあなたの子どものために作りなさい。 14 イスラエルの神、主が、こう仰せられ

るからです。『主が地の上に雨を降らせる日までは、そのかめの粉は尽きず、そのつぼの油はなくならない。』」 15 彼女は行って、エリヤのことばのとおりにした。彼女と彼、および彼女の家族も、長い間それを食べた。 16 エリヤを通して言われた主のことばのとおり、かめの粉は尽きず、つぼの油はなくならなかった。」

また、 II 列王記4:1-7「預言者のともがらの妻のひとりがエリシャに叫んで言った。「あなたのしもべである私の夫が死にました。ご存じのように、あなたのしもべは、主を恐れておりました。ところが、貸し主が来て、私のふたりの子どもを自分の奴隷にしようとしております。」 2 エリシャは彼女に言った。「何をしてあげようか。あなたには、家にどんな物があるか、言いなさい。」彼女は答えた。「はしための家には何もありません。ただ、油のつぼ一つしかありません。」 3 すると、彼は言った。「外に出て行って、隣の人みなから、器を借りて来なさい。からの器を。それも、一つ二つではいけません。 4 家にはいったなら、あなたと子どもたちのうしろの戸を閉じなさい。そのすべての器に油をつぎなさい。いっぱいになったものはわきに置きなさい。」 5 そこで、彼女は彼のもとから去り、子どもたちといっしょにうしろの戸を閉じ、子どもたちが次々に彼女のところに持って来る器に油をついだ。 6 器がいっぱいになったので、彼女は子どもに言った。「もっと器を持って来なさい。」子どもが彼女に、「もう器はありません。」と言うと、油は止まった。 7 彼女が神の人に知らせに行くと、彼は言った。「行って、その油を売り、あなたの負債を払いなさい。その残りで、あなたと子どもたちは暮らしていけます。」

みことばがわたしたちの信仰を強めるのです。みことばを学び、その教えに瞑想し、神の助けによってそれを実践することにより、私たちの信仰は強められ、正しい判断力を身につけてゆくことになります。信仰が強められて行くとき、私たちは神との交わりのときを喜びとし、積極的にその時間を取ろうとします。そして、もっと神のことを知ろうとして学びます。このサイクルによって私たちは成長して行くのです。私たちがそのように歩んでいるなら、どんな時にも生かされている目的に添って生きることができるのです。

あなたの信仰の霊性を表わすバロメーターは、みことばの学びと祈りです。これがあなたの信仰を成長させて行くのです。あなたのみことばの学びと実践、また祈りの生活は健全ですか?

祈りは信仰のテストです。

ペテロが投獄されていた時、教会は熱心に祈っていました。そして、その祈りが聞かれました。主の使いが現われてペテロを牢獄から連れ出しました。そして、ヨハネ(マルコと呼ばれていた)の母マリヤの家に行きました。応対に出たロダという女中は、ペテロが戸口に立っていると祈り続けていた弟子たちに話すのですが、彼らは「あなたは気が狂っている」と言って信じなかったのです(使徒12:5-15)。彼らの祈りは何だったのでしょう?彼らは主のみこころを期待して祈っていたのでしょうか?祈っていてもその答えを期待しない祈り、みこころが為されることを確信した祈り、彼らの祈りは彼らの信仰を明らかにしたのです。祈りの答えが、たとえ自分の願いや期待するものと異なっていたとしても、それを受け入れ神に感謝するのです。それは、神がどのようなお方であるかを知っているからです。祈りは従順のテストです。

主は最善を最善のときにしか為されないことを信じるゆえに、どんなときでも、自分の考えや願い通りになることよりも、彼のみこころを求め、忍耐をもってそのときを待つのです。あなたがどのような状況においても正しい判断力を持ち、「神のみこころ」は何かを考えて、正しい選択をするためにはみことばの学びと実践、そして神との正しい交わりを保つことです。

世の終わりが近づいている今、「心を整え、身を慎みなさい」とペテロは教えます。そして、神との正しい交わりをしっかりと持ち続けなさい、それが終わりの日にふさわしいキリスト者の生き方であると教えるのです。

また、この二つの命令は神との関係だけに留まりません。次回に…。